吉田流鷹書　共二

和書門
類 二三四五九 號
一七 函
一四 架
二 冊

内閣文庫
和書 類
二三四五九 號
二 冊
一七 架
一五四 函

内閣文庫		
番號	和	23459
冊數		2（2）
函號	154	308

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

一、鷹の渡し事
二、志きれとりかいの事
三、山とのみけやうの事
四、田物うけやうの事
五、うちきういしの事
六、かんたかれ鳥のはなりやれ事
七、おしきれまん所の事
八、大鳥のまんなられ之乃事
九、しもちれ寸法之事
十、さやうちくれ事
十一、はしかこれ寸法之事
十二、鷹かこといふ事
十三、兄鷹弟鷹一つはこふ法ふく事
十四、又たり志てさ渡り沼寸れ事
十五、山のくゝりを七日之仕立事
十六、たかふし常といふ事

浅草文庫

十七、かしら清さたるを立ぬ事
十八、目わるきといふ事
十九、たられ宗の事
廿、こせうといふ病之事
廿一、せうほといふ病之事
廿二、物付く狂病之事
廿三、うちけ乃事
廿四、大風と云病之事
廿五、うハせと云病の事
廿六、こうせと云病之事
廿七、ちうふの病の事
廿八、うちけの事
廿九、そけと云病の事
卅、[illegible]ちうと云病の事
卅一、くそうけと云病の事
卅二、家うつと云病の事
卅三、よこうと云病之事
卅四、爪のぬけるを治する事
卅五、癪のくるしそてのなりし

卅六、うをのめの事
卅七、ゆうれと云病之事
卅八、むとあり乃事
卅九、むしと云病の事
四十、けつら病の事
四十一、すやわら薬之事
四十二、ちくさの事
四十三、ちむしと云病之事
四十四、あうゆたの事
四十五、長命の癪見たる事
四十六、たん命の癪之事
四十七、そう屋くの事
五十、くさ薬の事
五十一、たと縄ら癪仕立事
五十二、ふろの事
五十三、なやつさは立る事
五十四、やうさ様うの事
五十五、あつけ薬之事（ろろ福このくろやさき）
五十六、ねんたう足込て薬の事
五十七、うしゆつと云病之事

五十八、やつさは二つ鷹にかす
五十九、おそこうと云事
六十、七もゝはいろいろ薬の事
六十一、もとやふさにお餌さゝのまはなす事
六十二、とをひかう仕出す事
六十三、とやふさに鳥をとらせてみる
六十四、男はおりにたかするす
六十五、骨次の薬の事
六十六、鳥とゝとたかの事
六十七、鳥ちかへの薬の事
六十八、目ひかるの事
六十九、とらのかは事
七十、りんかうとんかう祝云くませのす
七十一、大鷹こやくは事
七十二、大鷹はとはの事
七十三、鳥をくろまるさす事
七十四、たかのたかい男かいの事
七十五、鷹一りと一ツ二ツと云物 たか出ておちぬをかへとをす
七十六、鳥くるの事
七十七、
七十八、うつてはゆうにたまる事
七十九、たかいぬのこをとらえてちをとらせて薬とす
八十、かたこさんといふかなつけ薬の事
八十一、またたかの薬とす
八十二、ゆうさと云病とす
八十三、よいかうたとりゑたるこゝろの事
八十四、よかにひかわるを知す
八十五、出てくは薬の事
八十六、みてすをはく薬とす
八十七、ちをはく薬の事
八十八、わくとの事
八十九、くろけと云病とす
九十、鷹はまるこ餓にする
九十一、みとられかこの事
九十二、月ふりのかこは事
九十三、おしけは薬の事
九十四、鳥をとらぬ鷹は事
九十五、鳥にむせるたかは薬の事
九十六、うらけはなき薬はす
九十七、たかのちはぬける薬す

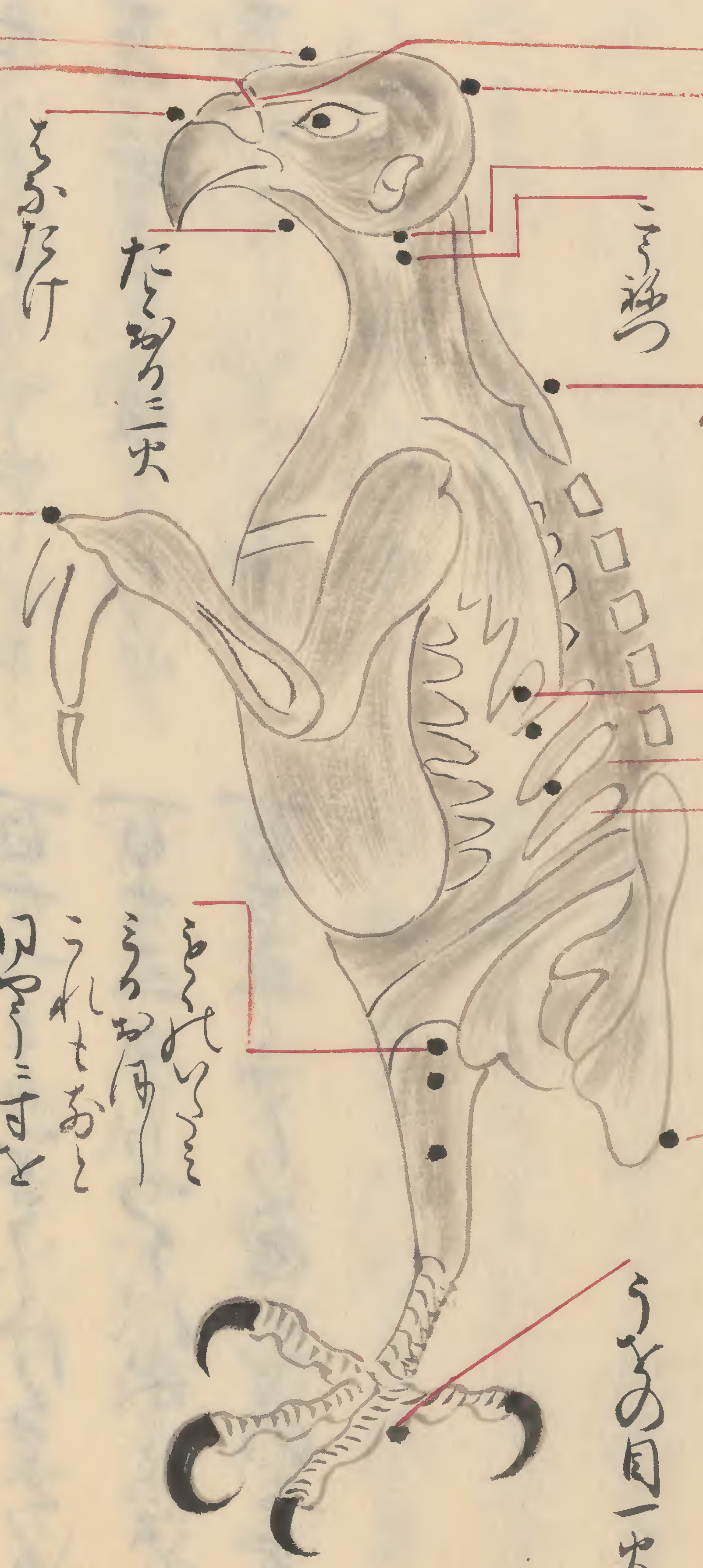
九十八、狩りくすりは事
百、ごうこゆうへさす
百二、山よてことはの事
百四、大そてきわふありて
かたいと点の事
百六、上ゐよりと綿り抱す
百八、たかはやくは事
百十、まいさう絨七夕ゝ
清すく多細の事
百十二、まいうはやそくは事
百十四、大のやり分きは事
百十六、まやいりは座さうとのす

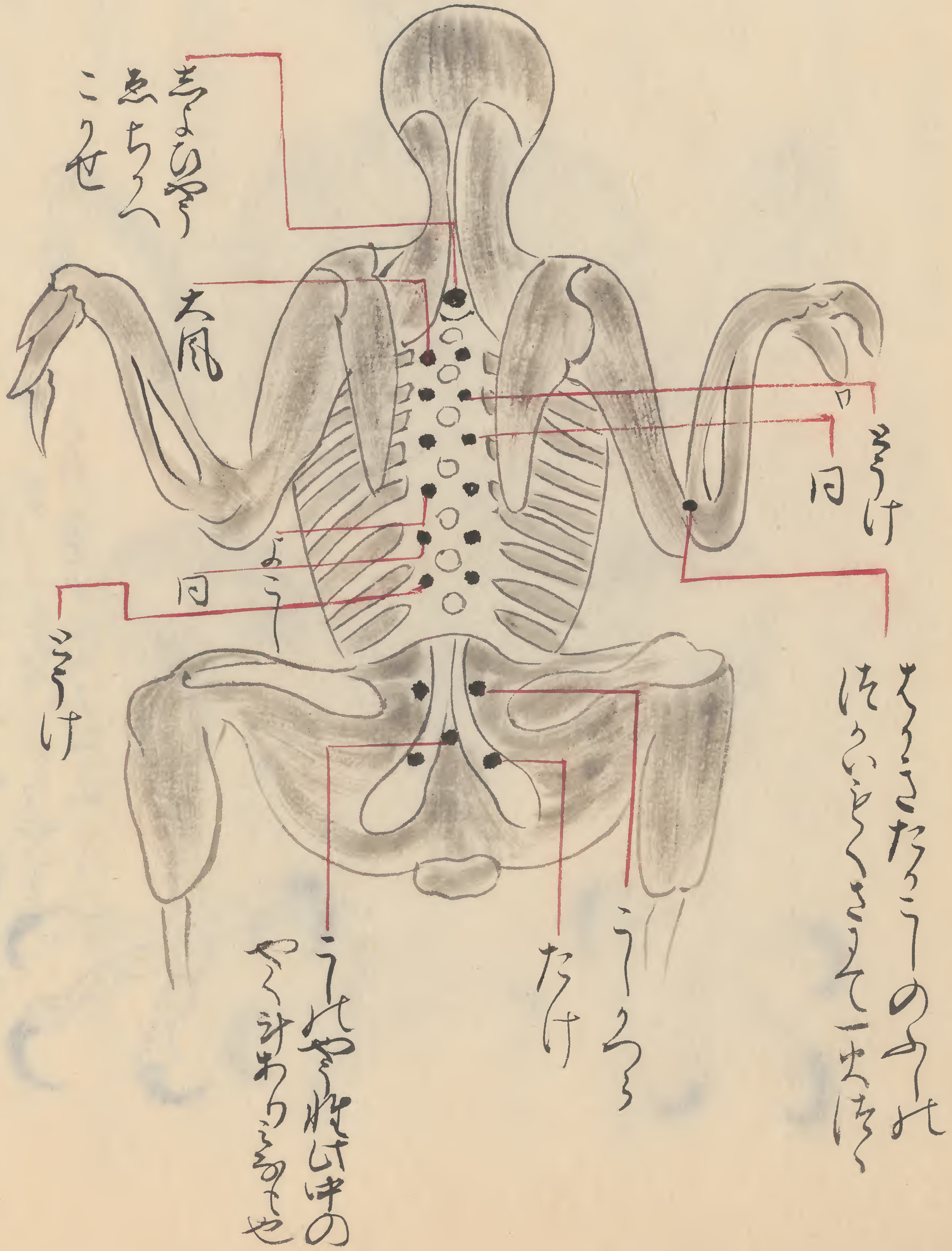
九十九、こ清かは水の事
百一、兄鷹弟鷹清すくす
百三、あま世こゝの事
百五、たかおさゝ点の事
百七、七夕ゝまいたゝと清すす
百九、岩うたぬきは事
百十一、まいさうはわけ付ミす
百十三、点はせん座くのす
百十五、まや守はくゝ草す
百十七、うつゝと行よさなむ
数のす

百十八、とうう山をかゝう
やミの事
百廿、うゝにとうかうやうは事
百廿二、鷹目赤一度ゝむかす
百廿四、かうさんをく事

百十九、とうふのうされ
やくくりんの事
百廿一、とうをそうけるくす
百廿三、こさうつかは水と云す
百廿五、きう色いその事

いきけ
たけ





一〇鷹の渡る事　一ニおちつる　二ニむち　三ニたちを
渡まへし　渡時しせんとかなをおちあけて渡
まへし　清めてあしくよりてとはゆる事あるハ
わるしてれかくにあるす

二
一〇しきれとりひの事　一ニしてき　二ニうしろの腹ち
三ニ左のかさはさき　四ニ右のかさはさき　五ニとこれ
はけきハ左のとあらハ　六ニ右れとあら　七ニこしの
うへあらハ　八ニことくハまつる　始のことく　一ニへ入て
あんとも　かくのことくいわしく　まへさなら

三
一〇山をれことむまをひめ春をうしろ　秋冬ハおく

ゆひ所ひとへさるへし上をハおつとりてとも又おとこ
むすひ所ハあるへしおんなハ六すんめんなハ
四すんにあるひとあるへしたゝハ三寸せ二寸せた
あるへし同其外て後にもとくれハとくけの材とく
くさすへし ゆいめをなとんして座さ事
一○ 四 同物のけやうれ事ハ法をとうしろよりけ座し
くんハゆいところおとこにむすひあい六寸うへし
おとこむすひ法さかしすかともなハあひ写
はらそしも法後くみしくまへしなら
一○ 五 うさ紀のひ所座に在ておもしく在て左右ハ

法まなりとも神の猿さしてかう事ころかす
同山をの事四ハれあしをくきちへ同ハたた乃
あしそうへにつさるくすろくなりふして
ゆらをとらせてゆひひ法けくおもしにおとこ
むすひハゆふ座しあひ六寸うへれゆいめおとこ
むすひたりし三寸せたにさるへし
一○ 六 のんたりの其れ法くりやすれ其なおきとゆへとも
一、ちえへ法よれなり 一、大さいハ法よれ
一、こさいをいわさなり 一、いるめ法よかまでもこ
これのんたりの其てあるくなりさいたいは其れ事

こさいけいゑいハつみてかそく之きれはほくり
うけく大さいさいハ大きれは二三されほくりかくる
とやふさふしうしとや三としもされハせこうらん
やうハうきりし獣うらふうさんの人ハ鷹とはくある
うらはしめ三もてれ事あり
七 一○おしをれ寸法乃事大たうゝ八寸二分山うさ九
ふんせう七寸二分山うさ八ふんあうせうゝ大たう
七寸せう六寸これあせうくうしかくす
八 一○大そのすほ大たうゝ六尺五寸せう五しやく五寸
ひこと二寸八分ある所ニたう志やうれよここてちと

いふ事あり
九 一○ふちれ寸法一尺八寸大たうせう一尺七寸又大たう
二尺八寸せう二尺五寸あ所くうしかくす
十 一○志やうろくれ事くさら志やうおくと云事を
かとけん三うき○にかさぬうかさ○やうにを
あめんかい中ハふすへかいハ上ハく所うを志きさいに
ほゆをちを一ふんほくおこさてうへをちいほく
三にうき○めうへよ孫すをく孫りほけて志きに
とく本をほけてこれ三をゆい合てしやう
おくすうゆけしやうそくとくさら志やうおくとも

いふ又けうかまと志やうそく九ゆふしきの志やう
うく是なり又こかまと志やうそくとゆふ斗孫
をそへてゆいはけくめちにすいさう引と紙を
まへりれ志やうそくあらきんれ磨なり
ゆめくまんりくす志やうそくれ翁弟大たり
いろれあらし

十一
一〇さしかこれすはそて本れあひさ六尺五寸同
たりさ地きさう三尺八寸かこれあまら
四寸二めんしかこきぬよ紫れらんとつきをく
あさきにそうをんいちうしそうへし志るれ

ぬいめ四寸にあく昔きくとち志うかまりて
ごはうとちやう口傳ありとかこれす法本れ
ある六尺五寸かこれあまら四寸しなりさす
法ありと又とをしはよいたりやうのちにおて
りひくくゆふとよりしゆいやうさこゆいり
かこのたをてうりちりひてむをひあかこれ
うちらりとにゆふ勢くいかそてにゆへうるを

十二
一〇壁かことゆふ串ハ志せん壁をとりて老人を
ゆんをいしうにゆふ串の国になち花
若ちうさをたちしやうれちにあくりひて

ゆふかこのうちわハ六尺五寸又五尺五寸と
ゆふ緒あり此かこハよて来れあまりをとし
きるゝす同かこきねハせんうちかくりまきて大
あ緒りをむすひ合てうちかくり又むすはさを
とる一たうはく尾羊ありあゝすなりてへ
おしを見すりてさかいは緒とし、あてをなりてへ
みもりハ此かこ緒りかこ一尺又りこ乃はふさ
やう大おゝを結ひこしあてくゝすかこのさハ
とこくくりてゝさ大おゝつなへ一ひきゆを
朝す羽をむすひへりすゝ所につなきを

にしきをとりしてゆふさとあり両緒これなり

十三 一○兄鷹弟鷹一つはふつゝく羊ありけり
これ石七尺五寸たゝきまゝとしやれちのこ緒り
兄鷹とも木に結ひさ弟鷹をとゝ来り
結ひてゆめく此つゝきやうせんこあるをこれ
大かいかこれやうからくのこと

十四 一○もたりを志さつゝ弟三ふ見せんかとはか
こにもとも緒志さ同うちをより結ひて
ふさくみハむしろかとかこのうち代両りを
ふさくせや三ふ見せん時はいりみて屋つゝあり

かこにはふく太りいかこ本此事　あさかし
さわるこれはなりしん時こそりとまへし　ゆめ
くゝるにかここにはまへゝるすかこれうちふ
ゆふかこのたかさハ八寸ならかこれそえに
ゆる紙あきてゑんさとわるりてゆひく
かこにはさてこれよやともせ同ゆふとおら
はかことゆふ時はおりをさしてかこり
まりてすこしはく唐つるくひかするに
よりしおもかくまりて七日おりくかこら
出しくるさとやこはおさて五日唐つるくと

おは是とひりせるくさて　す是出しいかさてまろ
うにまへて七日はらおりく手ゆるくをす
たるふゆとおひするまことかハはる同ゆや
二とり以九まつ二とおひするはんてハおるひ
ちけるを紙しはゆそてのつるおるひを
かこまてうちおとはにさてようれるとすく
よりてたいりひこ袴をそるやうとすゆれのんハ
なる乃とように手をかてあたるはちに手唐やる
水はめるはこまるへしいか手てひろきたるい
ろしゆをやくひのらすへてかたにゆをちて

うたのくはらしおもひすゝみくわしくかさつけく
それにもこしはふくかくてたいりい志てと
おしらへく御らけしとうふへき時ふあそはらゝ
りんと思ふなふは七時にハ明日八時にとりハ
見えすりそうしてそうりい志かとゆふすの草木
はうくみと急のとしくてそやはとよきさすと
んてせんあくは日ときうらかすらりふまた
みたと紙うしゆふともあまうこ志ふあらいまうく
とらんはなきさ時から急に合するとたと紙る
又此十ふんは志おくそうしまた世いきことうし

なかくとらんはうする事あり此西殿と見えわ
事てうりかふ事とうさ鷹志やしとすへく
のく事をもあるへうすす又ふくうる事もあるへ
うるを書く鷹御の世うるへしまたりと法すす
きのひかくは志らくなり

去
一○山くりを七日に志るさはう以事ありうちを志
ふり時分はいりみて屋りうかなるさねよみせて
三時はりおくせん拙りしてあらふ事あり
せん志ゆの事

一 せきさ志やしてう犬たこてうはう人へ一福すそはふん

一かゝる一とにせんしてりんとんとてころひは
りうをとてそうひてけんしけるたきて
たゝてをゆ徒ハ身のけとさうしろうけく
同身せうりをする時ことにかたへくかつさうる
たゝのことしこを附きろといこさなつうそしむ
きて見る徒ハやりてくらゐうは流く文るつ夢
茶の事せんの水うるを庭鳥のしわらら
の仍うとさらて中の色ふくなうとは宮うる
とい徒くくちとまつめのたうえりてせつる
あしとうふとしくうわすハこみ急小まへき事

二とこれハうらありてたとし茶の様をゆふ出すく
ゆちうりてかうこ徒をはくけく二日すう名をふ
庭いる時うけをおこにゆひく鷹のうゝに水
とふさていふてりんやにそとふつるく一時のうら
ありて鷹ゆるひくえをたくくきこゆる
未せんうらにいふもし宗むくなうらんひとた
こまてまてにまへ一時はうひよあけうたうある
たゝふなうとつてもかしとうかとあてゝかり
なうはいう文るとつさう文うとにはすくゆそうよ
四夜はうる家くにあつくいとのつる未てと

ひけあるいはかならすむつかしきしけひらちをとりて
とれらくおのつからなかく申候さなし
りんようにて内ゆしてむさたくらむをさいく
かみへしゆめくはくら忠のう孫にう次
あけ志るつる那才大のいろかくれこと
一〇（十六）もちふうけとゆふ病はしめいさいくはゆめまて
けふをかさ之めをふさ化志う寸続ハ未れこの
ことくなる物おひいつるはおい花の上をとくさ
りて一ひ度くく十すられ本なつるさよ如内に
はちれそこあつせされとぬけをうりてまつるさ

すにひとして一夜おきてく孫やさるよすようさを
にくるくく七日ちふにさす同うら薬れ本から
ひる残きこはとて日に一と度く七日のうへし又
あれから夜露れうかに水をふきてよいあつさ
夜はるさうんようなる此度うしやうれるゆ水
かみすうはへさすう本あるへのう次ちふさけの
やうしやうかくのこと
一〇（十七）かう露はきたるを志る本あるひハそくとら
入てうしらをうつ本あうはうひハかこよう
こはへおちらく根こそけてうしらうつ本ある

此鷹ハうし羅乃てんしやうれ常をとらてたゝや
かくさ流ゝまれハこかし羅をさけてたふらかす
ちなきゆへやいとの事かしられてんしやうめ
乃と繩のひろ紙志ゝさくさ志んりて三火又七
火屋くへし一葉の事志やうにしやと入て
三ヶ合く日ニ一度七日のふへしせう三ゝ
大さうに三ゝのまかハおくりらくへし
ある頃こうんゑんさんをかふ事吉とゆふ
事あり是れ南頃何ともしらよろくの
屋しやうと以へともたゝとこたうせたまんハ

やしなやうれ志よせん事かしらうらたる鷹ハ
屋しやうかくのごとし

十八
一〇 めわくとゆふ病ゆ病つくさを常にはあらして
かき此病ニてもれハかくさんりてめをとらう
はふをやをさきと以へ丸志やうして大事のや
まひなり葉れ事一わうのをれくすりやさき
一ヵさちん一きわくこうれしたミつをゆらる合せ
よくさすりて日に二度はく三日すくやいとハ
はやうしにありと以へ丸めれまへ乃はしれゆき
め紙のうひろと屋さき志ささてくさ志んりて

一ひきつけは三火屋くつしは病ハ称つゝら
おこりにはあそて急をもひやしてつい水をもと
さいしつて施しめわくこれなし
十九
一〇
ちれ字を鶴わしく志くちふをはゆり
ゆりこうもれハちふのあ多ふさうりていさ钱
もれハめれまへふくれめうりをもあさいつゝ葉の
半一かうひろ一せうめ〇一ふん志ん一かんはり
一ちやうし一けい志んこれをそめへて於てはの
なへりてちつせんし出して作とふそく
ゆうらへをすいもりりて御さはさを

すゝしつてためてまゐつは葉をさはんはしめ
こまのおふるは志んふわりてたうをふせそく
ちふ乃あ多を大たうふつハ六ふんはうゆ多
まと入志んをみまはりおすす志んの作さり
ちうさちれはくこま肘いうふていさは钱よちふ
れちをすいとつくれちは也ん志あをきす同
くちの内れらへのあこにあ多れあつて は葉を
ゆりくはしをわりてつくとさすもうられあ
多こくちれらへかるあ多とわすいさあひてく
両方へいさかよひてはしめハめれまへふ钱く

されしらくさつくわつらふとしてたせんくり
けりて雨なる細かに志てるひろくなる細かきう
志よれ事はやかうしにあわりとしてたうしろ
うあちろい同れまへの法しこれ二ケ所なるけ
のつかなりんようれひこさうかうしろうまち
なちゆ水かう色うつ次かのをひの世らくなる
のちらなち水をとうり事せしれやう志やうなち
又あるほとに三葉よ紙をゆふつとあり一ちん二に
けい志ん三にちやしこれをこにうしていかて
きふさすりてもよまさすこれをまわくれ

廿

やう志やうなちうあるとうんなこともいふすう事あらん
かうすけるけれやう志やうくれつとし
一 ○ こせとゆふ病はしめいかし薩れ弟一二まいて
わ弟やまひこうす後かうし薩の字一まいに
なくかうさ紙まてけくうた事なうら葉れ事
一 てんなんはう一かうさ志やう一志んれなう○一ひて
これをひてさそてらく号紀あわせらく又あらふ
色きせんし物乃事ひむろれ木をあわう○
のうへりてちくせんしゆとうんとよく
んして鷹をふせてはけのねうさ所をとらく

あらいくひろを盛さくてま志んりてりんを
んてしらし見ふをめらり○をあてゝこを壊
此葉を盛ることゝやりて其ここに法まさ二日
はりおこさて又此ゆふそてあらいおもしていせん
此葉を法きて其れまで七日をさて又これせんし
物りてあらいをとしこ法をけハすふわら
けもおへりあらすらしこれハひよくれありこゝ
廿一 一〇 こ世といふむしありてけみ○をくらいおもすし
せうほといふ病ハまることれて法まれハ法ふこ
たれふさかりふり此時うさすほまることり

ふさ一時はりをこさて法めたさ水をしら波
まこふをうけをたくあらいく又すをふさて
くさかここにつきさてもんしはりありてき
猿ハことくく乃綿のひやをとんやうとす
廿二 一〇 物ありほいくくらふ瘡ありて見ゑ三志さあり
てつこかきれとめりてくらふさあり二まるこ
志けいきおへの○くくらふたりあり三り
かんひやうにてくらふ瘡ありて神れとあてり
くらふたりはしめハ之十日ニ一二とをこりやく
あれハ十日よ一二とおこるもや法る猿ハ二日ふ

二三とくるふくるひやうハ南とふあるたるはなく
にあらりてそうらを見ちぬひろけひしめいて
こゑしかこらゑとうるいろやうちる座せるうとも
くちふうちはうちけさむかとにこゆる文きまれ
をとの座せたるになるこれをりをうとりめと
んうてたりしやうれ身をときよあかこれまへり
あるこゑとをとしさ又きさは座いきうをはけ
弥よきこせいやうあうすきつまるきうきよ法
かうしにきうも二万ふもまこかりけをいると
てくるふたるハもうくるふりハ五合もりてあ

いうえん而を治ち徒いうあうすかはちうきい川まる
三よおんのやうりしてくるふたるハきて七日ふ
まいてひけ念ともくらいおよる者川まる時もた
のきこきうくむさしくともわりけ附はくすうこさん
せんくるをせんして七日念をともあるいやうろそ
をうふありあ頃よ百億うはきいを七日かりとゑうり
いたきをとうし物よ付うくるふたるかりはこもし
廿三
一〇まうけは年さいくくちあめたりをきてふうい
ようらしこうせいようあそていこさあひあるし
茶は年一こたん一こかりはせんくるつ一あきひの

わすれく黒やきに一山すけゐのまのくろやき一あま
りひろれくろやき一こいのこうろこれく黒やき一こるつ
孫のきもれく黒やき一あかいぬのきもれく黒やき
一つ右をれくろやきこ石らい河て一くすりこ此
薬を七日のみくし又庭く清りをゆまし出しく
清〇ふのみくし きつうきよ清かうしに是うすし此
ころくれくすりをあてみとしへ丸たりとさく
のせたんいたく縁りかくし
廿四 一〇大風といふ病哀名とまふ事ゝ次ふあう
こゝ是れいふあうそをしにころくきこゆかこ

さわりなるひとをしるは此薬百けうれうじいを一や
くとよす又くすりは木をせんしてゆをつふこれを
ひくしりたらる病こそおとしあるこめしるすはふくを
此木乃ひまあはるこれ大風はやまひこれし
廿五 一〇うき風といふ病也〇はひまくの名をつくよ
なりてたるのわずらふ事なりなし此病は
まうちうけまは七日すきてまうちにおよ
なすたりをみせあて孫のきりふるつとはけい
りふてやりくのにうるをつけりにと細し此をに
薬をめりてひふくはつるへひきかとよす薬はるす

一きわうのこ一きんれうつ〇一くしかうきれさう〇のくろ
やきこれをこまのあふらにとき合くはをたに
よくしめりてひきこみをせいはくもりひまくれ
あひまとあうやうてなか給ふたくしひまくの
こつあうはよるりりて細くとらくし此病
のおとろまいいこらちをこれをてかゆまらつて
此病をとるなり

七十六
一〇こ世といふ病は〇しらとまてくれは祢う
れよくなる物つき出るまつ田ちるひろをはけ
てあくちをすまをヌきわうこをせんして細く

あらいは茶ち銭ともとんよりとすきわりまく
よくしあらふなり

七十七
一〇ちりふれたるはさいくあらひをし春てはよきさ
とり久ともとりてをひへ又ふこみてこみしみを
あらへりて〇てふすは毒ちよ度あ銭めかる
いりをやき又せんし物をてりけくじまさし
一たえこ一えこえ一おけ一くさし一くまれえあう
らん附は木もよりし一くりれ木のえてこれをせん
してはとれ〇へつよせさきやうとさきは〇ゆをいし
ろうへまりけくはいつきりしてもくうしれうへとつて

もちて三日むしとうらくすり也薬一両あつくし
はせんくろ一つちくり一こまはあるこれとあつ
る又のうへりてせんし七日のむへし急也薬
くひなうし風いせいの癖ありは急うるしと
いふとも此病のりんやうとすへにようてもち
いるをしくひるなくはさうしようしこたつの
薬ハかうさうはくとこれこうしいはて
あつるめてよし
廿八 一 なうさけさよみりそさおひなくとりて二つ
めとおひとゆり杉くみておつれとこれとよう

さけとんりて薬は薬一こうへ一つとうのきて
一つこうる又はきても一くうらとはちこれとあし
たのせう風んりて急とめし三七日かふ
風し此やう古めれる法はへうす此うる也
薬あはくまつをいのち中一とすやいてと法なう
しつり古うす
廿九 一 竹とうふ病うちと古とろり川にさてこうす
まはうら石はとしに法くなりて此病はつ
くす薬風いせいたりとすさ法るふよりて
此病しある古古んまへてうちと法くはいこふ

しをあらはあくはくらうせはうち紙をこうし
はくつきれこそせんくこうちみかふはあまく
細くいしくみさのことくをさなゆわけこもれい
うしたゝす大針ハ病ならまうちれ針ゝろ
乃ほそうれちくふをくさいそ一ひつあさめ
そくけをかそく病にうへをすいそこふ慎さ
こまのあつうをよくぬりて大鍼をうえ一寸
はりもくうへひのりこむにくつよあつうと
入針ハせんくこくそかくまわをにあつうりてとう
もふきためならうくすちの針さいの法の

をさめふおろしかへすふはくこ七日のうちーお
なしくあつきこ血ふひしさてふへうゆり
入さるしてちりてさいくかへしさいのくみ
針ハやにおよひすまつあつき紙は病ハ一やく
とすと走りをひよと紙くとあつうられくそ
うけくきさたふうちをはけいさをいなく
う細のなり

卅
一○腎すうといふ病ハ針鷹ハき走りくいら川
くしくてようさ思をかうしとへたせんくこやせて
そんする病あり業ハ針あつのいぬとらく

ともちをのむにほしにて七日のうちへしたゝめのちに
のをあたゝめてかふむしすわうをせんじさいく
のむべし

廿一
一○くちけといふ病はきうらち本はころつとく
成物といひ出る此病をきやうすも事わろきの
をりいさうけるくらいく此病はくものすわる
取ありやいとを一ひしてあふへきせん屋くれ
事一きやうふの稀一つあけひつこれをとく
せんして七日ときりをあふは事はにてはくの
あつをのまかさませてかふへしどうはちまて

のをあへてかふへしまことにきやうふはゆをかふへし

廿二
一○くりとふ病はつひろくあらてうちをかへりて
かこに浴て時はかこめのこうちをされけく
又をゆる時もつに是れくら葉の事
ちわうをせんじ浴○こうふかつ用をさおて
おろしのまはにて七日のふのは事きさを
をつたらとす稀すくはいさうちにかくすはいき
ちをませてそれをのまはにてはいさうとよう

廿三
一○ようしといふ病をとりけるしけさと用て
まてけるく事あり葉は事のまあさわうふ

ゆやなきこれをせんしてきれたる所をあらふ
同はゆをさいくりかへし日に一とはく七日あ
らふへし

廿四
一○はめのわけたる菜は車一に魚むし きたなきもの くろくろし
一二三年ふそくの絹やきさ一つまのかれくろやきにて魚
むしのかすもをいくたびやきふしてきうをためらく
はく絹やきこ絲綿合わけたるはめのふに三七日つ
あへしこれやきえやしれるとは廿色かくすいか
ふきやつりおかこふはるすきに二十日やえ
あらくしをやきんかんいは根いはりふ丸くらし

かくすうんよりれ菜こへむしなりゆあく痛を
こそわすゆ色のう次

廿五
一たくのくちとてれけるは菜の車一一きやこう
一せんまんの袮一わしのつきに一回つあれくろやき
これをうつきすふかくもり合せくはくろ同
たくをいけうかはつをうんようもと十すきよし
あまりにたくをこやしたくんいなう使りつてし

廿六
一○うわれめの車出こさら海わりをきんれたら
まてちのかくむしわをさし海しもてへを十こえん
しにつらきめをあててはく色つき菜の車

あかミれいのぬけかねし一きわるのこ一いわう
これをふかつふとさ合てたけこまうへり
うミをこさもつ又ひかこにたるくこれ入りてを
白紙をもいるかてきわるをちてせんしせゆ
みてうをれめをかとはりし川めりてひるう
しみてぬいつくしうこまを汁へこさ于すかふやくをひるう
へくうへまうミをはくうこれを志りつく白紙う
けりあすゆり事あるへりうす
廿七 一○ゆりきといふ病の事いおたのあふひろくして
ぬくる又汁しらいおゆりをもさおひるくぬくるまう

ちれ事をくさをみりにかくこめたれあつへ罕子か
ひゆう入くれちまひをたけをこしやこさて
一かんけりをゆりおりをかさ出してきんまん
みてをこしちを出しりかへき茶れ事もす
をふり酒よひて一秋おさて病やさふし二
七日りかへし同をすをりかへしをすは病○れ
名まわりれといへたせやまひまあるりにうく
名れかんとす汁しらおひおりたりさ○てぬくる
事たりしさけをごくこいへたせ時いよし
廿八 一○まとありれ事久とありてくちかさかりいある

かゝはりていせんのちくきやうにうちをあ
くるさすへきしんの事くはしさのわきしき
のちくこさかうするをうへのかたをおさしはさを
ちくされつとくまつめてはしんよめるへき薬
乃事しんの為るにおもちれくろやさ廿日よ
うちれうふのかんとうけかしりいこれなつこの
ころにとよし加し合いうふとうすくにうるを
とさし薬をねり合さくはさのあるにゆてて
さすしんをこさる事為れそと二かんはりおい
てこさるへしすけまはさる日のさすよる内にくひ

めく事あらしんはめくへき日のさすのちふさす
事はんてならさいくころをかりにかさて五分
ここにはりさて風をあはけるを第一のやうしやうとす
廿九 一〇 ちしといふやまひされ又とゝら一二分おさへてたと
くいをさすはくすりとちむしれ薬一かうまうち
れ事たるをみせくてのうらかすてつり此薬を
ちけまてはくろちう徒とし為をあひせとかこよ
はるすさ風をあつるをとゝさやうしやうと云也
四十 一〇 宗うる病れ事くひねをしるけ（はめんくろ）をあやこさふ
志あくにいされしさねよう紙しうれ為りまて点をあつい

七日のあへし同じんとこつる○と日に一度はく
七日かふつし薬はせい大きなるけとくれはふ
かとにあえし少麝香三はくと見麝香り
二つとおりものさらんていあへしうへはくる
薬は半一いまう一ひて一ひるのまろきこれ
とまり合てうちふるよくく日に二度はく
七日はくる也をひやと紙につきやうまてと寸

四十一
一○ こやおち薬は半一ゆふはさる○一とうまれくる
やさ也をあふに合てはきめにつきて三七日
のふへき志せつはきめはおちたん時から七日

ちんふんおちたるん時くに七日こく二たおち
たるん時七日とやれ半廿日ありてぬくさます志
せつ四月より七月までさすべし秋冬より正月
二月までいさます悪かすかつべき急は半いの
志をもつたとす四月より七月までさます比
時いたを出すゆるにうちてよし

四十二
一○ はくされ半はさめの為○れよられてあらす
禄いけともともぬりてもつれのまとむくる
ふくいつり一てんさんはう一ふまとこの紙すら
もみそてよくさすにぬくてかたをれたまてはけ

三日おきてゆもとこれたをせんじのみてゆへて
あらいくれはとく二七日やまひやまへしたゞいにいへ
そうらん時はら薬は清けしてせんしくゆへて
たゞをふせさいくあらへし
四十三
一〇ちしといふ病の事男女ともに二ぶばかり
おこりてち〻しくひをとるすしんとさす薬れ
事一ひそて一つましか一てんなんさうこれ三と
ひてよくきあわせひのまをとくさかとにくわ
はしんわりぬりくくひおとしろそのあまに
さすしんときる事二ぶばかりおこさてきる又た

右のたれらをすこしはしわらてはくもりをも
こまへふりくふすは薬をそけはあるをはこれ事は
わさへしらつりてわさのちくそくらすよい時く
わさの内に三七日よりさかハかくへらすあまり
くへは又おかしてあしきつゆあなり又月れ生六
月乃はじめよりかくへしゆふかれさのあらん
時ハゆうこられらへのうとをそけていきゆお
さすやこさてこうこうに加てつゝみ色しはおら薬
れす鷹れさいしやうの薬なりたゝみてかわ
はらふとらへたる紙りおちうとをしやうしはやく

してらや出していかすこゑへもはらく加く
くしよき薬也
四十四 一○ちいさき鷹は事かさたる所は前のちゝひろ
所をもこしおりあ縄してあ縄めたちいしやき
ひらくさ縄かけてらへに糸をつけさせいさりて
むしてはちにあるをかりて内にも縄志つく
くちをふさき七日やうしやうをたくしんなくは
二七日もやうしやうもへしうら薬の事
一かすうるもの○くもらんさう一かうおけはりもの
くろやき一ゆのさけ○一とうもときさきえて一つまり

こせふはせんくつ毛をおふに合て七日のみへし
又おしたのせう座んをうさきたる所に日に一夜つゝ
七日つけへし此ちいさきたるをはちむろにおく
事風にあてましきいたしはよりてめしよす
もろくはやうしやうしいへ夫風にあてゝみ鷹を
こしらせたんいやうきやうは志よせんあるへしうもを
くゝしていかもてに急かうまもそして急縄
りみへしちいさきたるのやう志やうし
四十五 一○長命は鷹のはうこさやうをきる事鷹はせい
ようまるこおちつらすけこむもすちけもち

いかにもこもりなどのふと志ところありなくなく
志てきらとけんはりしおもはけおふあまりけ
たとへば一さんわつらふとみへ丸そのしとりなどを
又まうしちかてもるすふめてたるさたのありけ
癪ハすこしつゝひかへりゝへしちやうめいの癪し
四十六 一〇たんめいの癪ままこりいりくちは大はふよけ
すちなとすちかなくやかるありなどそくの人志と
ろここらおすけ志れしと志てまくりし
同こゝろへもはし癪すこしわつらふかまへ
ちかしるかるくよわきありこれこさんと

よくくわんをけてはかへしちからす
四十七 一〇いきのは事くすりあかいりしはわるそのくろやさ
一女はうそのおちのくすりやき一こさしはめんとみれ
あかる覚えを孫の合ゆくいの志はおかるて
こさ合はくる又こまのあかるをよし此茶は
それまへこもくさるていきのはへをもこしあ
さうめはち此茶をつけへしや志やはるたるを
あくらかすへかる次
四十八 一〇志うし此事一あまり一こさんくく一てんなんゆう
一志のはけの覚いはきもせす大たる一つすうか
うら

おまへは大たうにもあつかはとかへしせうよは
こちらちをけうらいてかへしかう志せうくちふ
入てあつめて急にほくえてかふあるこさすうしと
四十九 一〇そう庭く此事一庭しほう一ふん志ん一りん
ほう一ちん一つうろほの一つうかのいうみし
わうさをさめにてても おうしく誠やこさふすうろ
かそうや此内之りんようこいつ是のやまいを
よしいほまても おくらるへし
五十 一〇くこ茶此事一アつそのくろやさ一五まうほう
一こさんこれりんたうのくこ茶之五まうさう大

鷹にこかこさころせうに一つのかへしこれを一つ
茶しつるつをはちやさんつくかとこさんはみく
りさ哭りほとあうせうにこつ
五十一 一〇たと伊りたつ志てるほへこさ沙弥二七日あうを
りんせんそくつき而にほうすさいりふし志てをくれ
あけてるるりも人におちんかとにあすてほく
二日三日志てをひこさに御ま出しよいあうつさ
まくつくわさんへつくとかうらん附花ふはとうり
れうしわとうを山りて御りたすをしとる
す先おしよせてりるるめをあてそりかふすゝめ

三ツはらかゝりてこそあしたりあるすうりに見ん
まろ羽とに出る時ふるつまを忘に侍るとてりひて
たそふれ水をふちよそてりい二時ゆりわりてならに
見すらいかあうすうるふるつすなき時を大たりて
すもうちれかのこれかさの志つをいきなりる
廿つかまとめにつゝそてかゝへし世ちあは十侍
ふあまりよしい済進と見二とうらんぬなき
と儀よりらんい出る業こりしやらいそりい大
小をこさる守すたとへそうすたあまきれた也
をちたり此ゆんにぬりまいるとはかに志つさ侍る

まろはしいもとぬうり
五十二 一〇済尾のふ三志さあると一にくろふ二にあふに
志ろふくろふ事い鷹はうさによりてもうし
くに業やうやし業一さいなりまつふいこふん
あふたこふかゝへしこれと一んくよりへい
くろふにすゝたくるい業きうすあふふに
おくくへい業こさうすあふ志つ焼におくくへい
あしき事ありい済進と見とわくへきこと
五十三 一〇まやふつされ事あけいうちおしても日五日
まふて称りとうふ一 称りつさ業れ事一ひき

ちやうんせんせん一おしろいちんせん一かうしおちん
せん一うつまれ上のりをとらそけ松らし志るこ
あるあ代さかきとこうそけいりふとしこゆりり
きゆ〻一せんられ出をかし合出ふみんして
あらめよはしきてあしたその時はらに見代
りひていりふとくろきかこにはうすさ志るさよ
いそとあてくおく此あつらうさんとおかしさ時
まるこうくとなつくさいくこうついをすられ
時水とみちよてりふ人をとむまのあしりさ
うんと何ゆう右よていうくす志りくおこさて

兄まは大くちとあさいりふと硃ちくりれかふあ
つうとくちうらたうす此いうに妻まらうたう代
みまはさことのあつられことしらうあくれいうて
とくちらたうすうん候うをゆま出しうちりて
よくくかうそしてもんけいまとめをけうる
はくちてりふをしたうくるひまてうれ日くるハ
すハはされ日もうつくしかくて二日はうやまあ
たいりひ志るてくうくえいいりふとうきくちよ
まて二日三日おさきたてうこを得うの志みうて
うりうふうれ頭りうかへ志てあてうれいか

けもさいをひあくうらたし祢りはくと以へた
声ふうちらハふけてあらす又声らむ下を
一ちやうらり祢りを法らされい声らあてようさと
以へた留数れ石にふくろ大たらふハかハす声らは
ちぬくりちらふ二らまけらひさて法らふよれ
くちへらんようなら
五十四 一○もうし此手一いよと一うらされ分てのせんし
よろゆ一おんしやく一らる崇気いつまを一す
うしなら此茱らいて祢りゆをさひくらふゆ
うまされい齋いらむしとあらもくまらる此手ハ

いつまをにれいちやかされ此すかしい法まをし
一すうし世う大たら二ハのふまるしきなら
五十五 一○く穃祢これくろやさなろき茱ふとあらく見
茱りしとあらそやかされ大一の茱これならい此
うらみてもこれところハきをのくろやきなら
男れうらちのもうしと声ろさいまろしこれを
世う大たらあらけふもよし
五十六 一○かんたらの名ひらくて此手りんこうらしふまれて
たらさたに声ぬうと以へたこのくまりをうらうらいの
法らさこうらかさ二りらたらのくちをわりらく

灸治にこれを縛りまてつゝくこさし入田の
そふをてつまくまくひ入ゝく志けゝくあせよかく
やりて蒸る次此薬方に志むきハ小いつに
いこさあつうちを一志つ治にさて身つるひを
すそれ肉まへあ久そて田のそふをうちにゝくりい
いこさすゝめを切しむこさ二くちこ口りいくりんは
見まれハ志てまゝ手してゝち下ゝてとらり
より出てりん其その口ゝくりてとりいふ此事之薬れ
事一かゝすれむ〇の身を古方すにひてく
一枚に灸焼ソ丁す一かゝせあされいまるさわさ

なまきを取て是を黒焼にして同分ちつきう
をこちんおとかて右大麿にみてうさこせうに
二万これを肉に用意して指りんに合する
五十七 一〇 こうかつ陸いうれ猛よ鐵をわきさたりことく
うりあうをあしりつとんてたき柳をよく
くおしてこ両うふわりて小指れみてきいゝらふ
まきさいゝふ巻此切口にひを付てあれ出ゝらふ
三火いゝらさしつけこを様にさん志んりて十文
字にさし紙し但大麿をやいとのせいたし
いてすへし薬あけひのさ〇を最こゝつよ合

せんじ出し此うれうる上を切てあらひ又石菖
の根を細にきりてきんきんのあたへ五分
ばかりさしとおす一夜おきてやけばそのわら
生ながらてとしく内なる生の中にて煉て
かる屋くと見へおひより入くにてはあらふす
あらへかす内薬の事全蒲を二七日から
かふべし

五十八
一〇
あやうきの二たりの事大小よし但生姜汁
をしめいいとをやう根は一石かこにほうてとくえ
とを南方のとらの煉てかしに煉てさて五日はから

おくこを煉二石のかこのあふ為りしに二石く
残ふ程にくりて二石の一夜つりくらふのやうり
五日はかり為絹にいせすく為をかこれ二石の
あたにかしつけるく二石のくらふやうさき煉ほかる手
見すはくいとむ事なしかるべき薬の事
二こ此かそのかゆふ出し為をしあらひふち
まそてしのりまるる家婦の身の絹ぬ乾して
七日かう無して別くに煉すく事あるへの次
をりたる為を一夜に二石にりふへしあきせん時を
生大をるけ出して二石こるあるうせく煉

せうとうけ出香を又あり候にせうともうつあとすら
といふ候もありけれ共俗ハくゆりかうすゝ
りしくゝ茶ハ何ほとも一つしるやうされ二つ
鷹かくれとし

五十九
一○志せん鶴を一炷に二とうりあるこれとうり
きうけ一をしらをといふ々とも○をといふ法度の
たりとはかくし

六十
一○七志あれるめ茶ゐ七茶一くぬきまりた
一石菖一　太んこ一　○すりし花かくなふま
とこれ本もりし一もわりれ本　一　茶師しゅま

一志れ本の七の茶これ七をあつめてありし○れ有ハ
いりて貴して　たんまよ百しかゝりて長さ一寸に
切兎めて太さふかミ三せうに二つをはさむ事
一志ちたる○ハ茶にさうすそれをよしあしハ　は
きそしハ七種の深茶をひいり又たゝりしすゝを
いふハ法度とも一つなるされけれきらの茶や
志るたらなるもよしやせたふりよし　法鷹
かりようさんり

六十一
一○もやかされをたりに於絨行きをわるくうくハ
きなはしをとるを志りてあるをいふすこく府

おい入ゆきといふ事あり常におそれのまし
すくはまるはしともうちて雨まくれはあを
ゆきこかさりといとゝはまるはしを躰なる
さきけもろし凡字まて二ゝにゝしうち海
まりてもむすつは鷹といくらともすつり
みれはまるはしを見まりやうともなくもや
つらくまるはしをうらんとあまり付なれ躰なる
ゆきをところさくひとのへてたつとまるはしと
らくやうもなく波たしおもうらもやつさを
まるはしいかすとられあるをいとゝぬり

ゆかてる様ありくハ一と二とそまるはしと
とれ三ともおもへハふのすゝにくむこのたつハは
ゆるはしあらくなすてハきりかふ事かすし見を
おい入まるはしたいふみハおもひりゆきとしそり
一とりすくむたつの事これをまへりきり
かす付わろくとりくハ小さくゝ丸出る事かすし
見すくる事いふもくすてをあけらく廿日
くゝきとやゝゆきさあらりをも見せすは日す
あきてもみ出せハるかすあるたつのことくすり
すくつゝいあつさすつくひるハやまあまなく

ときくぬすゑをするたいかい志てとひさて猶か
さうふ猶かいあかけて五日六日あかやうよ
志てをとこしらへく十分の志てなれした
一日わこさしそて次れ日とらくゝ葉れす十日
より内れもふてこのうゝのむしを太たかに三十
ほふせうに廿ほふこれを鉢におてん出まゝめ
ほこりふみしし又あしたのせう座んをためて
一口かうちうさとらにあつすへうすちやふさ
のとらあるまは物かけるうそり又と紙さ
そりに合する事をなとすちくるかとりよ

あま世ほけたんたゝいかくす志てまてゐる次
とらのふ事いかにもすくあくそうかふを作てとも
いつまでもおくゝのへい猶んをもらし候さ此日の
とりとらす

六十二
一○そくいたらふさいさうする事太かいおものかく
まかおくいかこめくかひさくやおもとくぬへいかこ
より出しおしをさすいかにもやりくるる
かこにほるさ三日はかりおこさそへくと座
そくをひか世こちは志てき紙ひさそて太かいわさふ
かくつ猶ん出くらはなりして多紙多け出し

こゝろせ文いふをむまきゝへと見せまく
われゆしとらたかゑをはむしらせをよせて
持ちらくちへと愈りしこ世とら伐さけ
なからくち急とかんくこゝろへあからこゝ附
かゝくとくち急とふいするやをそくと
おかへあかれはことまてたちくあくる
こを得むまゝてあくるさひとをすらのまゝ
未せんあらかぬるとはたからうるとして
白さむまのし疑さうさ字すこをいまらい
をゆひくひのかれかちの法さに法けてはさい

もろいまてわかそらくとさてはたらむつらく
そかてあふれをいけらいをさいからいたいふ文たら
つらといふことはとらをそらりて秋本ふを美
りをいすしてこふへそりをとりてくるを
たりつりといふおききらくうらといふ串とら伐
さらすしてきゝふりまひといふこたの治す也
うつらをいひつとたつとゆふひをらをいあらくつ
とたつといふあさきをいあらといふ色をうく
わろへきらし留こらきとしろをゆふ出して切と
まろいつまれたかふもよさらし文ゆちあらゆき

ゆふ串をさすり手にいちてかく串こし

六十三
一〇ちやうさに為をとらせてきまりてしつむへきたり
の見所ありくにまへむけて見すり時鳥をあらを
いちたかうひをすりはたゝかけ次第あつむ
たつあり熱してゆにふ肉切くたかうひあるは
ちやうされ鱼湯うこしをちやうされかん湯を
うりへきたつの忘れひすりことふしそうして
忘こいをあかいん為を湯るによつてあり大小
同おし味せうりうひつるし

六十四
一〇射れおりさたつ鱼いせいあつてと鱼いせいたつふ

をひ所ありしてをへてかこあつてつとあつ
りめつ又山つそて志せんさ〇をとうしかうつてとまつ
これいおかつれ出てこさ為をあつ守りしてうう小
油たまちり射れおりくなりうつくちう菜れ串
一りんさうれる〇を七るすにひそて湯け志積を
拂うゆうんれかとうしこちゆうん人をあうりいて
うう二七あ又こ七あもとうし

六十五
一〇骨湯さ菜れ串かう〇のい出色たつうあ時鳥
おさうか〇さしあつ方せてき骨れ上を一火厚く
志んれ串ゆのすかをふ弟つうあ方へ四方く

かゝる禍よきすこしもはやくあきとひらくべから
ずかおりてとけさえてゆひはくゆう茶乃
事ゝ一ゆのさ○き所ゝ一みしきのくろやき
一つはらこ淺れせんくろ一くまとんはり一かねおけ
れのものくろやき一かるのくろやき黒を合二字
かゝる宝にいれてあしけすくして清さめをうけハ
清けすらしくはてぬとうんよろしと申
六十六 一○急候とゝたりとひらくとす事忽いのまれ
そまてれ男をうへてのぬむちにあてゝうけ
をしてゝ申すハたりをかせて一こされこむへし

うかゝすあちのくさくかへし
六十七 一○急ちんへのたりの茶れ事ゝ婦しうつかさめりて
おろし合薦をもせてうへし又かうさせい
きやうにたまはらゐをゆて一日のうへし書いろく
くハ清きさ茶ちやうによ付てたりいてむしとあら
まくはりいてうへからうとむこゝ急をハうます
六十八 一○目ひろの事ゝ匹ふよりしすを切く吹又とふこふ
あしたはすくとうんよろしと申
六十九 一○ちふひろの事ゝふこれちをまるにねりて貌
日ますへむけてみすれハ此茶をうきさるまちう

ひら出るはらをまけて先一寸以後ちゝこ出せり
のこをミちんかとつミちらに結けてたつをふせて
もるたにつらくとさす
七十 一〇めんとりおんとり頭ニよそへ結ひ付時めん
鳥をハ右おんとりをハ左をとらせとさせらへく候
七十一 一〇大鷹ハ脉の事りんたつにあつる時鉄鷹お
ほハ暁おつる者ゆとしよすニ寸時雨ハとくの
あいしら三りハあるのもとへあてぬ羽をふ手を
よせてなくニかのりまいさ出るやうにたちハ出てよし
又ひへくと去りハ出てたつし

七十二 一〇大たかのことは空よりてうけて落るゆふハせすハ
ことし大たかハ空ことらて落つとらふべし
七十三 一〇志ぶて鴿よとら指ハ事夏秋冬ハ人と塒合
秋冬ハたかを人の塒ハかよへさすへし
七十四 一〇鷹ハたかひをゆふハてふとへたつ時いつくし
かこおらん時ハ何かいとふるら
七十五 一〇鷹ほこにつなきたつ紙ハ一尺ことへつる時も
一尺しゆふし又一二ともゆふへし
七十六 一〇鳥のくつ事春之月ハ四面のけにする秋冬ハ
常ハつとくまくてかへるあり

七十七
一○しらぬひきてあつらゆるものハ田のひとてとゆふ物を
かりてきこめをあらいてまぜかりて紙
あらいかふへし

七十八
一○しかてのうらにたまりのしと茶一てんかんほう
をさめよて おろしかるさにかりそて袷合かう
やくのよくこしてはくる

七十九
一○たか犬の子をとらへてちさうりてしはらくように
うきるをいおゆのしかりしを粉みしてあり
きいうにつりつけてよこしさめうるをよふへし
よゆくにさめたるを二日三日のくハちありて用

まゝつ通し

八十
一○かうこさんとうま申ハじまりてものけりおとりて
しまてたりこのおもゐをとりておかうらくこ痴ちかう
入くれをおほく入て七日七夜袷りてあけて
かうやくのやうにしておさそてあつたりのうちおろ
まうくハなつきやうそてはかりうくし申一れひらうや
らくしまんよくへし見ハなにあるハすましき
申ちれとも自然としゐためかしるとや

八十一
一○ほうのにまふたりの茶りんれとうしかりれ思やさ
ほるこの思焼これをおかるこ合かふへし

大鷹ハ大まめかしせうハはらいてかへし
粉薬の時もちや半服かし七日かふ飼し
其いふにかうとまかけしをめへともつへし
ありかす十すへきさかり飼を懸けてもきさた
うにひさしするなり
八十二
一〇ゆりさといふ病ハ半し尾羽ハ去遠なをして
かろく飼つけ又ちんといくらか尾羽もうき
ありてやうて飼つけハ病治く半し病とくハいく
ぬれたし薬あこなり
八十三
一〇ちいたかたと紙りきてきちて半まりかちして

かへやいさすあをむ〇そしむこさ二ケ三日あらへ
まいらしてもみをてうてく黒をひかせたしおく
ひかすまハまへのにたかやうにしてみるさく
いさきたる鳥をての内へてはる疵けしはいさまる
鳥をゆりしくらん時ふはまかきしとたかの
もつひるけ出し見するされハあなよりかへ
おようかすさらされハ餌しつけてかふかやさニ二
三度まかはしてさおひあくされハおれかしら
のてちらくとさらつまるけたくかかすゆる
聖あるなりに見せん時うきの毛へ十つふはけらり

いさゝかなるすゝめにほとこさハ一時ハかりありて
鶉こゝすりにひくき茶のしてんなきさたりをしるへ
これを云ここもるはしたいしたいにその内まろくしたいにて

八十四
一〇なすにひろの出さかを志ろ串の紙ふつさき
うらをかうたなのすらうすちれなうかう花を
ひろの六かとんにて鷹をかせて糸日れおく
湯なとうしらをむけてうつこのむちとたなふ
あらておけハくすりをとりいてひろのあらをかうら
もけてえりしそうたうせハすひろおすして
うしられなふとくらふ

八十五
一〇志ゝゑれ茶の実一杯ろい一ちやうし一いまう
一いつくらつ〇花をさゝさ合てたりをかせけの
稀よ付りゆめくくにいりて庭つゝ次花両銭
いはまをとよし又冬三月正二月まてハよし
わきをむしりそてこくひいり出し湯さと
をひよあつまハかつ次わきこうはりて一をも
のこて次うつろたくしなつハひま口ちうりてハ
たりのくるひろき実あらせんし挽れ実く
志んを実してい口をまかせてくちへいつぬ
やうにしてよくあらふ庭しあゆよろあさら

物をかこにまくらゐくうはらなら好なり
なまぬるゆまんしあらいくるかこにはるへく
一〇八十六 月ミすをはく茶れ半一りうすのいさちきよ
ちやうしのこをすうしかてゐるへし中たたに
三はく三兄齋に二はく三ゐるくす此茶にて
三とうりにおよいす此茶のまちすしてハおのつから
なをるとかうし三日のうちに一色つゝ三色ひるを
きささてあさいようべし
一〇八十七 ちをはく半ミうけのちゆ月にあまらてはく
茶のさのかう所ぇにて忌焼みして七日かうべし

うなりはらけはつ多鐵の先昔日ハはつ以す
一〇八十八 ちくとの半ミいさうミれ茶一つなり内ハの
茶きんの水うに〇を七日のむべしきんたくを
くろしかうす
一〇八十九 くろたけ病乃半ミろさうたれおてきのこ
れとしをくさりて一ひはさをやく一ちよう
一茶明茸一大くこ一菖蒲れ根これをよく
貫してたうをあせてあらふ此くこゐなを六日
をはけてあらいそてよし
一〇九十 齋れまなこ織にちれくいそて治せて〇いさちまち

一まなこはつかれし物出る時眼いそきたゝをぬ
せて夜冬ともにいかにもつめたき水にて目をちを
おしけともすくひやすこと様いかにもきつくさす
ともまなこふさくろき所にはまさまな時いら
ありてみまいかともなれはてともくなき所かゝ
きよめてといせんのやう書やうにしてかくなす
三度ほどやしやうに及ハす

九十一 一〇みみれかことといふけのかこをいつて中にはなる
を入らくいかにもひやすあらするに水をあつく
しけへころむなりやうにして薬になるを吹てはめ

たくしてはさみ肉へ入る時いまていかにもく
すきくちゑをかいてそこのひをよくくかうして
あつるいよくたつくらくなりよくくれて
爲さしこれをもちや入るまてつる薬の次第し

九十二 一〇此法のかことハはされ時はなくをこるなりこれを
いはきの物にてもゆふかこるなり

九十三 一〇あしけの茶一袋このこれち一ふしのうち
一ちわり一ちやころ一せんまいするも一まとされ
やまそをようさすりし七日はけへし但たらく
たらんは此茶にさらす夜冬は春秋にあて

りひくくこさ下にすこし清なきをいれなるらへは
鷹れいさま清るかしぬるゝ〇をあてゝよし又
大鷹かつこまりてこふにあらるたつのあしけ
てんたんにうにすきれやふとくるへてふゝかり
うこさ合てをこうしこふよるかるへかさしきりて
此薬をふゝわのおちぬやうに清くる
一〇 九十四
鷹をおさぬ鷹にはつへしくすりせされいれちを
ふちりてりいて其はつくありてふりさせい其
の水をふちりてりつへしふゆるゝはすこしあらく
めてかつへし五とゝハかゝはすこし夜りうつふ又

色清くゝをへこさしむけくあさむらたとひさらハ
清めにわつらふとひへたまけは此や其薬にて
なすをも色をもおしまうれをとりなす絵をもて
未うさらいあるへりすそうしてたるゆへをこ
なさけるふ此あるをつふ未ひゝあらさるひ清の
やう其うとゝへ大鷹をひやしたるんにさくへうるを
一〇 九十五
色よむまるたり是ハあつ様つとゝいふ病気新
くひの中かきれそう絵あり世て一大清ゝやさて
くきれ木のことをせんへしてひるのそにかくへてふ
毎し

九十六
一〇うつけのはなし茶は年に三日より内かりひてはな
さはりは半からしかとを遊てらうけより心遊
つつす茶の半をこへのきうとこくをさ出して
あしけるれちをしろいりやり急にはな〇よ小ひ
さらあつきのくろやき急をあわに合てのみへし
おしろいのもさされるいてもおしろいハこちん
かとりのへし急しあつる火にあてゝむろうけ

九十七
一〇貴一れ書性とすわするとき半あるへりよす
たとのはしれめくるまうちれ半めけるはしの
ようこさんこうをぬらつらてなれさしきたいおし

あそ上にぬるりて〇を三日はなけてあつる茶れりす
うしかものくろやきをなりらられく服やき急と
七日合てのみ通しぬりて〇れ七日に一度はなわ
はるはいへはなんる廿日計〇すちの酒をもとに
りかへりす又さんけたつんハおまめにける
きめ代あてゝ茶れみくりれいうそつ黒焼みて
みんをこゝをこまるふきはそは茶に神り合て

九十八
七日かおまめに付る廿日さはりくこゝ急にすへし
一〇神り茶の年うけの能茶ぐりをあつはて
いくりふなりとも神りて中に入ておさそてきこし

はくなるへし

九十九 一〇こつかの高さハ其の木ニたまりてある〻法病ニ薬之

百 一〇寄かこにゆふへき事 木あい六尺五寸かこの幅
四寸二分にきる鷹さの寸法はきまりたるといへとも
たかさちかきちかきに又木あい五尺五寸ともあり

百一 一〇兄鷹中鷹ハかこに法すへき事 木あい七
尺五寸たかさハ何にても寄事之兄鷹とりと
木ニ中鷹とらハ木ニ法すへし

百二 一〇山よりてのこよは見えたりとも云大きりてあひ
よりてまうしとゆうてあつうたかうる兄鷹ハおひ

よりてけてとつらとこらあひてけてとつら
ともかくる二段いつまてお後あるへからす

百三 一〇あまり世ニ其の事 兄たかハ二ニ四中中鷹ハ
三ニ四中合ニ其の事 兄鷹通よりかけハそれを
よくよくしつらすあるへからす何ともさひの事
兄たかハ二ニ四中鷹三ニ四はくきまるなり

百四 一〇いぬるてきわよまりてくるこよはかるといふ〻四と
ゆふ事あり是れハとたつる時とやりと四の
尾ニ四ともいふ兄あ段ハ違ひ大りいのことも
まり同せことハ四ハけいとも尾べし

百五
一〇鷹のおきこゑの事 おうとおくの事かんせう
あり兄鷹二ツ三ゑ半 弟たかに二ツ三ゑ半し

百六
一〇七夕ならまへのをハをまいりといふまゐらす
物ともいへり七夕をそてとねり物とゆふハすゝ
わりといふんなりとねり物といふハ七夕をそてとねり
あかくのことく三緒り物といふなり

百七
一〇七夕小をいふ緒はなく事かこハうちね本よ
末よ菜をおれてかこにゆひて三くらりに
してきさしを写よくさりけく左ておくし
三一本をうちけておくしまん時まではなく

日にむけてきいふるをかんとす

百八
一〇たかの告やくれ事かるゆきたらハおゆきまてを
かんとすくひのこといふへうす

百九
一〇鷹たぬきを見たる時鷹をやみさにいら
さすていふの事たけ一尺二寸ゆるれかりて
けをうち懸おしてようをあさにそてう両し
兄し兄弟鷹にすへし又たかるあさたけ四
寸二ぶあ方の両り四ぶうまをまろくくけて
ゆひのけをくすあし三緒をいさんかうむすびよ
まくし同はなく時たくるぬきさ緒大をとり

二十すゝにさしと待もて又わけてもさす二百文にし
まんしふすんかまりてくるをとゆひつけ
ときまへし

百十
一〇ついたるを七夕にはすへいたれいかしのせいはるに
よりてはすさてむろ事にさいたれはる
さいくるとなとせうぬ月まそしのわれしとん
七夕は後おやこれわれをすりたよりてまそし
のわれとゝふさうはまさいたら

百十一
一〇ついたるのわけまてはる弥よひいの時より
孫の時まてまへてたるのかにあをゝさて

こやにはすくあつさたるの時よりこのおかり
まてまへつく又あをぬはすさたるとやをめんりんより
まてあてうりをやくちゑにはるハさしこさふひ孫ら
まゑてふちあらをさすはやくりつくと
あれハこを孫うとにておくまゝをとくおく
事あたへつゝ次まるハ二三りんはらうりて
おくつしをつすこ四とふハすく画つすあまら
にまけくおけハくちへにあすといへともくち
まてあらてかろくわるゝすゝやをおいはすく
わるれハ画代さけりてておくへし二と七とふハ

すく庵をすゝめてかふくち忍もろとをて
おこさたつる時ことくんようにあつて数くち忍と
かんとくすいかふしやをさたつとわろきくち忍
よそておけいうすゝす見えてあるいつ重れたつと
同年七とをいふて九ともりわきをいたるいけあつきつふ
よりてあるすんのかりる年あり二ちめ乃
うつろとうさくち忍にとさかへていけふてろよ
入て指りしら整りそてあり可ふまいや中にいおよいす
ある一らつろうくてそうりとすいせんのとさき
たる鷄をあけ出して丸すりやう二日一とすり

みいたつのいもかりすかるくようし又たつそり又
のこうい挽ありー二けニりうり三まろきくへ四
あるけあるすゝる年五たりふ小すきなる年
たとい千万れ書をかさまりすと又ととます
かされいとの志せんあしりんようはをとをとそて
吉齋道とす

百十二
一〇 たいたつの志やうそく長て經といふ年あんい
十二とをいふ九たくし志あり忍露れかした六つ
はくろ一二すゝかつろ二ニおかつろ三ニいけ露四ニ
そうやくかつろ五ニすりしといふかつろ六そ

盆をかく湯もし此かくろと云てかくろれかくに
清くろこさ人これ云てかくろになりてハ付るまお
多人のとす月給ありてたゝのむきくとおるハ
此茶のう盆くとかうきせん物よおさりたる時
ハそうけの茶を云よつうそてうかく一し如し渡
てる器ハあう人のとすもく人なとの事けりわし
百十三
一〇 忘れせんおくれ事 一たぬきをたゝふりくハは
百日こうぬとのしりてきれたりこりひてせうう代
あるし茶とりひく大事なりしやうてしとうれし
一いぬひたりとの下物中月一れ西さ物しまこうしと

のう人のとす又うはひよとりをわろし一ときひハ
清ろさ忘するをたつふりまろしあくけハくろし
かくもてやもる物し一ことられかりぬ物山りうひ
うらあはちとくひそきのさくひし一たぬきの
くひ合の時乃茶なとくのくれうもかきをこそ
けくあつうに支ほりてかうこき有しなりてくま
きうゐえこゑときたてもかう文語しよした
とひ百日こうすとし此茶とういて一さり清うい
さりつこき物し一刀て清くいいは通れたりきうし
こうやもくたるし一いさちれ力よもとろしして

かうろてかくきたるのとあふらし　ひやくたち
一つ忌の事　めいぬとろしことふたしふことを
すらさうにハ於袋とろしたく時ちるとかうたくハ
共やうこきろ代のつとをなりこをすさ時とまつ
たううくと形りくけんくたち一座とりを
ひつされハ共てひさていのふもわろし魚つきくを
いつふもとときしやせさうに魚つろくさいしやうし
一鷹よ共んの忌ていふ事あらこきしれめんとら
れりけをうら忌ちらへうけふしとらし
百十四
一○お袋ちさのくるせれ事たて一あるとすら時ハまる

とりひとりをとらるしかうす二と合にまるさとかうす事
たられ甘一のそくあらあまるさ合あれりひ所
はのうられ抜けきるとにまるさ所まる形とあら
それをさしきらてまるおしるへハ鷹れ茶をするに
よりてなく袋くく鷹もいちむかさくくよれりひ
さしろし花いむらしかうすたうせひたるとさとらく
かうらち忌なりよくくひまへし
百十五
一○犬れ眉りなるもの事　甘鷹ふハさけうさ多りきハ
三一尺くちよ眉りたるもいぬのおさきありあて
くひてさうくしいまもふちりてあるへし　同こ

たかみハそとらちてはくろし見をハなすましと云〃
ようさいまでとおさへましこたかふハとゆるかう
ともこひろ一しやくこすべし
百十六
一〇たかやつさのくすり茶半一むまのふん一をゆる
はかりの見をおろしてちや一つくわし青鷹より
見鷹にハもんつくわとをやさりうにかすへし
百十七
一〇たかやいりの座にてかの事志人のはかれ此を
おかれたいをとりてあくにいれてこあへて
とりてもろくしてやく日のすれハとしハ三七日
中ハ七日下ハ三日のすをへて座くわとよし

さるけさてはかる鷹ハ中におよそすいつ迄れ
やまひ中でようさし青鷹にハちやせ服かし見
鷹よりうれらをはつらいてかつくし見をとりて
ゆをよくかつくし同さんりまの茶とし
あさし此これよハ両さす
百十八
一〇うつろをたけふをゆむのすて七九たかへし壁まで
はいつとのきくわりけくさてをさしこち
わりけたるけのをゆるさをあまへつるこへの
かるへおくらハやれさけの大なるをとりてとわりれ
こうて色々よをゆをて多くまてゆふむをひめハ

はしめにとくちんかうにむまをひかしする又かくむ
まをひかしすなはち作れりとハ八寸より写寸たかさゝ
はしの事しかとのハわかれしの事し

百十九
一〇うつら山あつ水引てかけてもそくしかけやうハ
とらのをしむまをひめハ一むすひし表秋冬
かつへし花も冬ひさりてかけ侍りすハ
あらいてかけ侍し

百六
一〇こうひのとらくをせを右をとう事ちやうくん
れうこんおくる時のやうにうつへしそうしてかうふれ
右をうんとせら左ハふかんにおいてとちへ入なり

百六一
一〇こうをとうしその名をとらふ物にかけくまいらせい
御事ハ大内へ此事ともくたすりて御つる事
あるへしはとしその名をとハ申きりかゝりて
ちりハ梅冬ハ松秋ハもみちにはくろこおしをまる
名をこふまへさせてくひをとらへの名をこ水ひさして
ゆハはけゆいめハ男ししにあるへし名川よおろ
物名らはとらをとうするふハたちのあしかもはなれ
おしかもとてふしきうてするなり

百六二
一〇鷹日本へわたりはしむる事ハにんとく天
皇の八十七年をたもたせ給ふ四十六年の

らし暦はしめて越前はうゝの法へ是のとし
の正月のそらの日のそらのこゝにわたる同暦を
はらふあまた世界に三尺千するきやうとくの禄を
とのあまさおさゝきのひしやくうるふのう纸も
あるとはうにあまた世に禄すとたうふのかうまち
もてにつるふもしかまんとくするをはしつもとら
禄をとをきうこる後たうしさん禄すとの寸法
くのとくあるとよきさとんてしるつるふわゝの
事あるにしるこきるしきやうそくとゆるまよんて
是をもてハ寸法あるへし

百廿三
一〇きらつれのあとといふ事ハ行のようをとつやうに
うしをこめて世いしやうのあし百日はけて百日め
にきつけたるしこうふとうる出してこまゝうの日に
わしかさめて三てはふわうて中のたまちをこきふ
そうらをこうそけて兎めてうかくしいは建の篇
ふもさいしやうの葉しひやく大一の葉し行ちい
はくいくつもしてはけ通し其をときらつれ
といふなり

百廿四
一〇かうこさんの事し暦のうせうるはさんとおく事
あうさんのうもて三四十二七十二のさんとあつとつて

まつ一つをよこにおきそれ下に二つをたてよ
おくまりそれわきに四つそろへておくまへまり
よこに又うしろに四つそろへておく先しよこ
なりひろうらまへ東へむきておくひろい横を
みなへむけておくらし醒してしやそておくなり
りやうにほ一揆は十ちやうより内にありしやし先を
かつらわるすまじきり色さくひようしして
かつのとくおくことより先川ゆうしおさく
おもたるとくんちんみてもちいる事はそうして
たつは日にむかひてまそてはうせす海とすとあり

ほこの事ならこれ一ちやうまり先によりて
おもたるとまわけらりそうしてたつは吉由けんよ
一さんをもちいうをなしと知り

くのとくおくし

百廿五
一○きり色をの事十二ひろにしてとらへし
こやふるとへおいかせより時はこれをさして
まりはじめてあるとへき事しかくこきんる

ゆかりあるたとひ色をうちたつすとも世度
しき事之肯一れひろつまらすしてもい
たちの色をおいかひろりまへし

百廿六
一〇こ流布の形といふ事ハ行なるにたまりふる
をもいそらむなら意の末れ流布にたまりたる
をかんとせらる二文をたちかくハい流達の
病としよきなり

一 宗りれ筆の事あしけるれなり

〇これ此書者肯一之秘密也

国立公文書館
National Archives of Japan